



こころとキャリアのカウンセリングオフィス結(ゆう)代表

# キャリア・コンサルティングに アセスメント・ツールをどう生かすか

## 結果の解釈と伝えるポイント——VRT、GATBの場合

### 山本公子

キャリア・ガイダンスでは、カウンセリングとあわせて、適性検査などのアセスメント・ツールを用いて、個人の特性を多面的に把握します。自己理解や適性理解を促したり、カウンセラー(コンサルタント)が個人をよりよく理解し、その人に合った適切な支援を行うため等に利用されます。

アセスメント・ツールは能力適性面とパーソナリティ面(職業興味、性格、価値観等)を組み合いますが、職業適合性を考える場合、職業興味と能力適性の二側面が基本となります。総合的適性診断ツールであるOHBY<sup>(※)</sup>やキャリア・インサイトもこの方法をとっています。

ここではVRTとGATBを例として、結果の解釈やフィードバック、支援していく際に気をつけるポイントについて述べます。

各検査について、手引等をよく読んで理論的背景や構造、効果と限界をよく理解しておきます。フィードバックではワークシート等を利用して見やすい結果票を作ります。できればクライアント自らが採点して結果票を作成すると納得感が増します。クライアントの気持ちや考えを聴きながら、平易な言葉でわかりやすく説明します。解釈は控えめにします。

VRTは興味の強い領域、興味と自信、基礎的志向性の特徴など、元の問いに戻ったりしながら説明すると、イメージでしやすいようです。

GATBは点数の高低にあまりとらわれず、プロフィールの凸凹で得意な領域や苦手な領域、生かせそうな職業群を伝えます。希望に添いつつ得意な適性を組み合わせて生かしていくようにします。知識や技能、経験等も考慮します。

VRTとGATBの検査結果の方向性が違う場合は、無理に絞り込まず、興味と能力の両方に広げて見るようにします。まず、興味から見ていくと無理がないでしょう。

カウンセリングの中で強みや良いところ、エピソードが引き出せると自己効力感が高まります。興味を持った進路や職業について調べるなど、次のステップに繋げることもあります。

検査結果は適性や進路についてのある程度客観的な情報です。漠然と思っていた進路が自分に合っていると自信につながります。それまで気づかなかった分野に可能性が広がる効果もあります。今までの人生、学校生活、職業生活、家庭生活、環境や個人的背景など、できるだけ全体像を見ながら、未来志向で一緒に考えましょう。

希望の進路に適性が出ない場合の対応は、臨機に考える必要があります。自分でも、やはりそこは苦手だ、向いていないと納得できる場合は、適性のある別分野や、同じ分野でより易しい職業に目を向けられる場合もあります。一方、希望にこだわる場合、その意思が強ければ、今後努力して、知識や技能を高め、納得できるまでやってみるという場合もあります。

検査の結果はそのときの状態を反映したもので、今後、クライアントの学習や経験によって変化し、発達していきます。可能性や生涯発達の観点で見えていきましょう。

最終的に進む道を決めるのはクライアント自身です。自らの資質を理解し、よりよい意思決定ができるように、カウンセラーは信頼関係を元に協同作業を進めていきます。

カウンセラーは自己研鑽を積み、人間性を高め、良い支援を目指す責任があり、傾聴他のカウンセリングスキル、様々な知識を学び、実践経験を積むことが求められます。

アセスメント・ツールの理解と活用もそのひとつです。習熟してくると、検査をしない場合も、相手をよく観察し、適切な質問をして、その人の特性をおよそ理解できるようになります。人の心理を客観的に捉え深く理解する力がついてくると考えられます。

より質の高い効果的な支援のためにも、多くの方にアセスメント・ツールを活用していただきたいと願っています。